

第2節 縄文時代の土器について

縄文時代前期に位置すると思われる第Ⅲ群第5類土器について述べることにする。

本遺跡出土第Ⅲ群第5類土器は、従来早稲田遺跡出土第6類土器や表館式土器に比定されてきていたものであるが、本報告ではこれらと分離した。

本土器群は、地文縄文が多様であるが次の点において大略は一致していると考え。①焼成が堅緻で硬質であること、②地文縄文の他には口唇部周辺の指頭圧痕、刻み、そして両者を組み合わせたもの以外の装飾要素がみられないこと、という2点においてである。また、水平あるいは内傾するように口唇部を面取りする点も特徴として挙げられる。

本遺跡出土のものは破片資料ばかりであるが、全体の器形はおそらく次のようになるものと思われる。口縁形態は平口縁のものが多いが、左側が落ち込む段がつく口縁のもの、波状口縁のものもある。口縁部は垂直に近い角度で立ち上がってきて、口端部が外反するものもある(133)が、やや内湾気味になるものと直立したままのものがほとんどである。底部は124によれば丸底かそれに近い平底となるものと思われる。

これらの特徴を有する土器は、青森県内でみると、東部地域では六ヶ所村表館遺跡、上尾駱(2)遺跡、大石平遺跡、弥栄平(4)遺跡、東通村前坂下(13)遺跡、大間町小奥戸(1)遺跡があり、西部地域では今別町山崎遺跡、平館村尻高(4)遺跡などが挙げられる。

本土器群では地文縄文に結束第1種(羽状縄文)がみられることから早稲田6類と、口端部に刻みが施文されることから表館式との関連が考えられる。小奥戸(1)遺跡では半截竹管による押し引き沈線文が施文される早稲田6類土器が伴わず、表館式土器が多数出土していることを考え合わせると、より表館式に近い位置を占めるものと思われる。また、「ピッチリ縄文」が組縄縄文であることを解明した高橋亜貴子氏(1992年)は組縄縄文の使用時期については、「早稲田6類c」の時期としながら「早稲田6類b」および「大木2a式・円筒上層a式(中略)頃まで使用された可能性を持つ」としている。岩手県滝沢村耳取遺跡や仏沢Ⅲ遺跡では組縄縄文の面取りされた口唇部に指頭圧痕を施すものが多数出土しており、本遺跡出土の指頭圧痕と縦位刻みを組み合わせたものが、これらに対する一地方のバリエーションとみることもできるとと思われる。

しかし、従来考えられていた「早稲田6類→表館式」という両土器型式の前後関係について近年見直すべきであるとの見解が相次いで提示されており(註)、縄文時代前期前半の編年観を再検討する必要性が生じている。したがって、地文縄文、口唇部形態において多様である本土器群も、既知の数型式にまたがる、あるいは分割されて使用されたとみることも想定可能であり、早稲田6類と表館式の編年観が確立されていない現状においては編年的位置づけを論じる

ことはできない。そこで、本土器群を早稲田6類、表館式とは分離することによって問題提起とし、資料の蓄積を待つこととする。

(註) 早稲田6類と表館式の編年の研究史は高橋論文(1992年)に詳述している。

第3節 弥生時代の土器について

本節では、量的に多く出土した弥生時代後期にあたると思われる第Ⅷ群土器について述べる
こととする。

家ノ前遺跡から出土した弥生時代後期の土器の器種は、甕・鉢・壺・小型土器・蓋がある。
台付鉢の可能性のあるものも1点ある。浅鉢、高坏、皿形などはないようである。本報告では
器種によって大別し、文様要素によってさらに類別したため、器種によって類番号が異なっ
ている。そこで器種と文様要素との対応を以下に示す。

弥 生 土 器 類 別 対 応 表

文様構成			器 種	甕	鉢	壺	小型	蓋
交 互 刺 突 文 な し	沈 線 文 あり	平行沈線、鋸歯文のみのもの	1 類	1 類	2 類 1 種	類 別 せ ず	類 別 せ ず	
		区画帯内に沈線文様を施すもの	2 類	2 類	2 類 1 種			
		条痕文のもの	3 類	—	—			
	縄文のみのもの		4 類	3 類	2 類 2 種			
	無文のもの		5 類	—	—			
交互刺突文のあるもの			—	—	1 類			

では、全体の器形・文様構成等がある程度把握できた甕・鉢・壺の3器種の特徴を、器形と
文様について列記することとする。

○甕の特徴

＜器形＞

- 全体の器形は曲線的に変化するものが主体をなしており、頸部の屈曲は弱く、「く」字状に
屈曲するものはわずかである。これは沈線文を施文しない土器に顕著にみられる。底部まで
接合したものは少ないが、全体的に胴長となり、径の小さい底部となるようである。
- 頸部がくびれるものは、口径と胴部上半の径が同じくらいで最大径となっている。
- 頸部のくびれがかなり弱く、口縁に近い位置に頸部がくものは、最大径が外反する口径に
あるものがみられ、胴部が垂直に近い立ち上がりを呈している。
- 内面に明瞭な稜を有するものは口縁部に近い部分にあり、口縁部分が狭く、口唇部が薄くなっ